



コラム 花と虫と子どもと未来

1 園庭に生態系を再生することは、新しい時代の社会基準

共生の時代

21世紀は「共生」の時代だと言われます。その大きな背景としては、20世紀の終盤から急加速した「グローバル化（グローバリゼーション）」が挙げられます。50年前に比べると、ヒト・モノ・資本・情報がとんでもない速さと量で世界中を行き来しています。そのことは、私たちに多くのメリットをもたらしました。今まで手に入りにくかったものが、簡単に安く良質な状態で手に入りやすくなり、経済活動も拡大しました。その一方で、グローバル化は大きなデメリットももたらしました。そのうちの1つが地球規模での環境問題の深刻化です。ですから、21世紀に求められている「共生」は、国籍や宗教などの属性を超えて多種多様な人同士が共生する「共生」が1つ。もう1つは、ヒト以外の多種多様な生命や鉱物などの物質と共に生きていく「共生」があります。

共生する「感じ」と「コツ」をどう育むか

いずれにせよ、これまで以上に「共生」の時代を生きる人たちを豊かに育むには、幼い頃から共に生きる「感じ」や「コツ」を育む必要があります。幼い人は「仲間と協力し合うことで生きることが豊かになるよ」などと言葉で教え込まれるよりも、友だちと共に暮らす毎日から協力し合う「感じ」や「コツ」を自ずと学んで身につけてゆきます。ヒト以外の多種多様な生命や鉱物などの物質と共に生きていく「感じ」や「コツ」を身につけてゆくのも同じです。動植物の存在の大切さを言葉で教え込まれるよりも、幼い頃の毎日の中に多種多様な生命と共に過ごせる時間が当たり前のようにあることが大切なのです。ヒトとの共生を学ぶ環境をつくるためには様々な工夫が必要です。ただ何もない広い空間に幼い人がただ集まって過ごすだけでは、共に生きていく「感じ」や「コツ」は育みにくいでしょう。ですから、保育の現場ではハード面、ソフト面共に様々な工夫が凝らされているはずです。同じように、多種多様な生命や物質と共に生きていく「感じ」や「コツ」を育むには、園庭にパンジーやヒマワリやアサガオなどの一年草をただ植えるだけでは難しいのです。

エコロジカルな園庭は新しい時代の当たり前

今の幼い人は、多種多様な人同士が共生することを当たり前のように求められる未来社会を生きる人です。同じように、多種多様な生命や物質と共生することを求められるヒトでもあります。園庭や園舎の周りに小さくても豊かな生態系を再生し、様々な動植物と共に生きる毎日を過ごすことは、自然環境が豊かだった昔に戻ろうというロマンチックな社会運動なのではなくて、グローバル化が急加速する時代に当たり前のように求められている新たな社会基準だと考えられるということです。これからの時代、保育者が幼い人や地域の人と共に園庭に豊かな生態系を再生しようとすることは、建築時は殺風景な保育室内を幼い人と一緒になって豊かな文化的空間に創りあげるのと同じような意味をもつのです。そのことを、21世紀に保育の実践にかかわる多くの人に知っていただきたいと思います。